



「幼児の生命力を育てる保育」を



河邊 杲

〈新入園児の子どもたちが少しずつだけれど、自分の顔を見せてくれているように思う。気持ちがあぐれていると感じていることも素直に出せるのだなど子どものつぶやきから感じられる。保育室の前一面に咲き出したチューリップの花を見てあ
る子が「わあ!」の歓声をあげると、まわりの子

が集って来て「これが大きい!」「これがきれい」。また蕾を見つけると「これは悪魔にやられている。魔法がとけると元気になるぞ」と男の子。「ねえ先生、なんでこのチューリップはこんなに大きくて、これは小さいの?」私が……「わかった! お父さんチューリップとお母さん



チューリップと赤ちゃんチューリップなんじゃない？」と言うと、まわりの子どもたちが反応して、妹や弟の名前が飛び交った。「これは私。これは妹」とすごく嬉しそう。

チューリップの花一輪でも昨日まで青味が多かった蓄が多かったのが赤味を帯び、その姿を鮮やかに変えて来た様子を見逃さないだけでなく、それを自分の嬉しさに変えて受けとめているのかなとも思った。

午前中は小雨が降り雲もかかっていたが給食が終った頃、少しばかり日差しが届くと、チューリップが蓄を大きく広げ始めた。その様子も子どもたちは見逃さず、しつかり受け止めすごく不思議がっていた。「わあ！ 大きくなった」と大へん興奮していた。「魔法がとけた！」というような意味の言葉を言っていた。表現こそ乏しく様々であるが、チューリップの花の様子を自分のこと

のように喜んでいる子どもたちといっしょに居て、なんだかとても、ほのぼのとしたものを感じた。〴

*

これは四歳児クラス（三年保育の三歳児クラスからの進級児十五名と、新入園児十六名、計三十一名の編成）担任の松山和子先生の四月十五日の保育実践の記録の抜粋である。

こうした日々の子どもの保育の現象を、殆んど毎日のように、実に誠実に書きとめられて来ていて貴重な保育資料でもあると思う。（近日この記録を整理し、まとめ刊行できるように企画がすすめられている。）

この記録からは様々なことを学ぶことができるが、ここではその一、二について気づいたことを述べたいと思う。

先ず最初に気づかされたことは、子どもたちの



生命力への信頼についてである。

入園当初に出会う様々な不安感や当惑のような事象を子どもたちはくぐり抜けねばならない。精神的緊張からの脱出であり、解放感、とか自由感の獲得とも言えることである。

そうでないと自己実現の第一歩がふみ出せないことは周知のことであろう。

この子どもたちに最も必要な経験が計画され、用意もし、具体的な援助の手だてもいろいろと工夫されもして来ている。

待つ保育論まで論議されもして来ている。「遊ばせて置くだけでは幼児の主體的な活動を促すことにはならない」とも指導されるが現実なかなかないで子どもが育とうとする姿をみせてくれないで混乱とまでは行かないまでも毎年、同じ課題を持ちつづけられているのではないだろうか。

人間についての根本の考察と言うより私たち自

身の保育についての省察ができていないからではないかと思う。

私は幼児教育にかかわった五〇年程前から「自発」は自然発生的にとらえるべきだと考えて来た。「自発」の「自」は自分での「自」とも理解できるが、人間の本質から考えれば「おのずから」でなければならぬ。「好きな絵をかいてごらん」と言われて自由に描けるものでないことは表現について研究された方はすぐ理解されるが、「必ず動き出そうとする」という人間の営みの根本のところはなかなか理解しにくいように思われる。

言ってしまうえば「そんなこと…」と思われることが案外頭で理解されても動きになってこないことに気づくのが省察であろう。

子どもは生命力をもって生長しようとしている。保育の第一義はこれではなくてはならない。松



山先生の保育の姿勢にもこのことが確認できる。

それは、そのまま子どもの姿に具現される。

次に子どもたちの姿を見ると、まわりの自然の小さな変化にもからだや心の全細胞を働かせて、これと向きあおうとしているのが見えてくる。感覚を総動員して、持っている知識を全部を投げ出し、これを自分のものとしてとらえようとしたり、その感動を表現したり想像した夢物語を創造したりして話すなどや自分のものとしたい欲求が課題の形となって、その解決のための情報を収集すべく、そこに居あわせた保育者に情報を求めたりしている。

生物学的に言えば最高感度のバイオセンサーの働きが起きていると言ってもよい。

またその発見したものを、まわりの仲間へ伝達したくなって発信し、そこに極めて自然な交流が生じている。そしてその伝達し、交流し合う喜び

がつみ重さねられて生命力の働きは増大していくことが如実に見られる。

しかし保育についての現象を詳述することは人間細胞の働きを解説する以上にむづかしい。

今、私は松山先生の四月十五日の保育実践の記録の一コマをとりあげて、保育の本質にふれようとしたが、いささかの落穂拾いのな役割しか果たしていないことを充分自覚しながら、意の通じ難い部分を汲みとっていただきたいと思う。

『幼児の教育』刊行事業百年を祝福し、新たな発展と変革に大いに寄与して行つて戴きたいと念じると共に、この偉業に出会えた幸福と光栄に感謝の意を表したいと思う。

(元洗足学園短期大学)